

熱性けいれんについて

熱性けいれんは、乳幼児に見られる発熱時のけいれんです。てんかんや急性脳症、髄膜炎、脳炎などの原因となる病気がある場合は除きます。生後6ヶ月から5歳くらいまでに多くみられ、日本人の子どもの7～8%が大きくなるまでに1回は熱性けいれんをおこすと言われています。

けいれんをおこしたときは、手足をつっぱったりあるいはがくがくさせる、白目をむく、顔色がむらさきになるなどの状態と共に、意識がなくなります。尋常ではない様子となるので、周りの人にはずいぶんと長く感じられますが、多くは2～3分から5分以内におさまります。そのまま死亡することはまずないので、あわてずおちついて様子を見る必要があります。ゆすったり、急に抱き上げたりなどの刺激はしないほうが良いです。ただし、けいれんの最中に吐くことがありますので、その時は気道に吐物がはまらないように顔を横に向けてください。

昔は舌をかませないように口の中に割り箸などをいれましたが、舌をかむことはまずありませんので必要ありません。かえって口の中にけがをすることがあるので、口の中には何も入れない方が良いでしょう。

けいれんが10分以上続くときや、けいれんのあとに意識が回復しなかったり、体の動きが悪いときには早めの受診が必要です。

通常の熱性けいれんでは脳波検査は必要はありませんが、以下のような場合には、脳波検査が必要となる場合があります。

- ① けいれんをおこす回数が多い
- ② 1～5歳の好発年齢以外で発症
- ③ 片側のみがくがくさせる
- ④ けいれんの時間が長い
- ⑤ 熱が低くてもけいれんをおこす



熱性けいれんを予防する場合はダイアップ坐薬を使います。これはけいれんをおこすことを防止する薬で、体温が37.5度を越えた時に使います。熱を下げる効果はありません。熱性けいれんは発熱するときにおこしやすく、熱を下げててもけいれん防止にはなりませんので解熱剤を使う必要はありません。ダイアップ坐薬は8～12時間後に二回目を使用すると、2～3日効果が続きます。ダイアップ坐薬を使用すると、眠気が強くなったり、ふらふらすることがありますが、時間がたつと改善します。ふらふらしているときはけがをしないように注意する必要があります。